

創立当時の思い出をめぐって

北 本 治

原稿依頼をうけ、光栄に存じます。記憶がよくありませんので、第1回胸部外科学会研究会の記事（「胸部外科」1巻2号）および、日本胸部外科学会雑誌1巻4号の故福田保先生の「胸部外科学会の成り立ち」、同じく青柳安誠先生の「日本胸部外科学会設立の前後」を読み返しましたところ、それらに充分尽されていますので、筆が進みませんでしたが、再三のご依頼におこたえするため、一筆させて頂くことにいたしました。

当時の背景としましては、結核の死亡率が187.2（昭23）を数え、近年の9.5（昭50）の十数倍もあり、これを「何とかしなければ」という時代で、結核の外科的療法の極めて大きな位置を占めておりました。その **social needs** を反映して、それを中心課題として取り組む学会が要望されたわけですが、同時に心臓外科の開発も芽ばえておりました。

筆者は当時東大第3内科の助教授時代でしたが、大学卒業以来師事させて頂きました故坂口康蔵教授が、糖尿病とならんで呼吸器疾患ことに肺結核に関心を寄せられ、かねがね外科の都築教授と協力されまして、肺結核の外科療法の発達を推進しておられました関係もあり、肺結核の外科療法については、格別な注目もし、またみずからも空洞吸引療法を手がけ、故塩沢総一先生と共著で、空洞吸引療法の小著を出しておりました。外科のト部美代志博士（のち金沢大学教授）とは患者さんの手術をお願いします機会も多かったものですが、さらに、当時創刊の計画のありました、南江堂の「胸部外科」の編集会でもご一緒でした。また、この編集会には、宮本忍博士（のち日大教授）や第2内科の藤田真之助講師（現東京逋信病院長）が顔を合せましたので、お互に期せずして、胸部外科学会発足の気運が出来上がった気がいたします。と申しましても、私共は当時若輩でしたので、このための下働きをしようということで、南江堂の応援をかりながら、将来の学会を夢みながらも、まず研究会をスタートさせることに、奔走したものです。昭和23年11月2日の夕方、文化会館というところで（今の上野の文化会館ではありませんが）、大先生方が打合せにお集り下さり、翌11月3日に東大内科講堂を借りまして、第1回の研究会を開いたという次第でした。故大槻菊男教授を会長に、故福田保教授が司会に当られました。1題10分で、演題数は23でしたが、これが皮切りになったわけですね。当時のエビジュアルスコープは、まだ、手札形のころで、X線写真はシャウカステンを使用し、多くの図表は、大きな画用紙にかいたものを、木の腕木に画鋏でとめて、これを図表掲揚台にかけるというやり方でした。会場の内科講堂の裏手の廊下で、それらの図表のついた台木をあちこち持ち廻って、会場へ運んだことをなつかしく思い出します。藤田真之助博士や、ト部美代志博士らもそうだったと思います。

全く今昔の感にたえません、十年一昔といわれることからみれば、ことにサイエンスの社会においては、むしろ当然の進歩なのかもしれません。本学会の末長く発展されますことを祈念いたしまして、稚筆を措かせて頂きます。

（日本胸部外科学会特別会員東大名誉教授・杏林大医学部長）